

公立高校のコース編成と私学の対応

澤田秀之（東山中学・高等学校）

京都は寺院が多い都市である。多くの宗派の寺院が在り、それぞれが日本の総本山・大本山というのだから、京都における寺院の影響力は大きい。そのような一寺一院がそれぞれに寺院子弟の育成、或いは檀家子女の養成のために創った学院や大規模な寺子屋が、現在の京都の多くの私立学校の始まりであり、それぞれ独自の建学の精神に基づくコース編成がある。

戦後の京都府政と公立高校

戦後の世相が落ち着いた昭和25年から経済発展を遂げた昭和53年まで、京都府知事は蜷川虎三氏が務めた。今で言う地方自治の意識が非常に高く、優秀な実務能力と膨大な公約実現によって信頼を積み重ねた政権で、府民の絶対的な支持信頼が28年間も続いた。しかし一方教育問題では「15の春は泣かせない」というスローガンを打ち出して公立高校の小学区・総合選抜制度を採用し、また学校教職員の勤務評定の実施等も拒否をした。その結果「蜷川府政の教育政策は甘すぎる。教員や生徒に甘すぎる。学力がつかない。」などの批判はあったが、それ以上に府政そのものは圧倒的な支持を得ていた。この間に、私学にとっては教育面での府政に対する府民の批判がそのまま私学入学希望者を増やすという結果に繋がっていた。

昭和53年の政権交代と昭和60年度の公立高校コース再編

昭和53年、京都府でいわゆる政権交代が起こった。府政の様々な面で変化をすることになるのだが、教育面でもその変化が現れた。それまで公立高校からの大学進学率の低さなどに批判が高かったのだが、教育改革の1つとして昭和60年に公立高校の通学圏が小学区制度から大学区制度へ変更された。また学区を変えただけでなく、学校内で「Ⅰ類」「Ⅱ類」「Ⅲ類」というように学力別能力別編成が出来るようにした。

「Ⅱ類」は進学を意識した学力の高い中学生を入れるコース、「Ⅲ類」はスポーツに秀でた生徒を意識したコースで、それまでの府政では考えられなかった改革であった。

また普通科、商業科、工業科等と言う場合の「科」についてだが、「京都府唯一の科」がある高校は、その科に限って府下全域から生徒を募集できる。例えば森林リサーチ科や海洋関連の科を持つ高校は、京都府下にそれぞれ1校ずつしかないので、府下全域が生徒募集区域である。「普通科」ではなく独特な名前をつけた科は、府下の広域から優秀な生徒を集め、大学進学者数を伸ばすために極めて意図的に設けることができる。これを使い現在では毎年難関大学進学者を多く出し、国公立大学の進学者数が現役だけで100人を超えるようになった公立高校がある。

平成11年度の「市立堀川高等学校」のコース編成

平成11年に京都市教育委員会が市立高校のレベルアップを図った。これが京都市立堀川高校の「人間探求科」と「自然探求科」である。設立当時は「それぞれ文系と理系で良いのに、このような呼び方をするのか。」としか思わなかった。しかし「京都府下唯一の科であれば、学区に関係なく生徒を集められる」

のである。しかも堀川高校の場合は「京都市立」の各中学校から同じ「京都市立」堀川高校への進学を勧めたのだから、直ぐに優秀な生徒を集めることが出来た。この年から、この指導の影響を受けて堀川高校の入学者学力は上り、京都の全ての私立高校の入学生の数、学力に影響した。そのためにその後完全に中高一貫化し、現在は高校からの入学者を募集しなくなった私立学校もある。

平成16年の「府立洛北高校」の付属中学校開校

府立高校がこれに対抗し、市内の洛北高校に平成16年4月から中学校を併設した。同じ通学圏に公立中学校が3校目で、これまでの京都市立と国立大学附属中学校以外に「府立の中学校」が開校したことになる。募集は80名だが志願倍率は開校以来数年間ずっと5倍を上回る。2学級分ともなるとこの地域の中学校定員が流動的になり、京都市立中学校にとっては生徒数だけでなく学級数にもかかわるかも知れないということになった。

平成21年度の学区改訂

昭和60年に学力優秀な生徒を集めるために設けられた「Ⅱ類」だが、第2次ベビーブームによる高校生人口が多い間、平成になっても10年ほどまでは、どの通学区域でも「Ⅱ類」だけで基礎学力を備えた生徒が集まっていた。しかし通学地域でそれぞれの高校にⅡ類を作っていたために、生徒数が減ってからは「Ⅱ類」としての学力が維持できなくなった。平成21年度から学区も「京都市と乙訓地域」と「山城地域」をそれぞれ4地域であったが2地域に減らして進学校の学力維持を図ろうとしている。平成21年現在、京都府の公立私立高等学校は次のような数になっている。

京都府の高等学校数（定時制を除く）

京都教育大学附属	1校	
京都府立高校	47校	（京都市・乙訓地域 18校）
		（山城地域 11校）
		（亀岡以北 18校）
京都市立高校	9校	
京都府下私立高校	41校	（京都市乙訓山城 33校）
		（亀岡以北 8校）

従って、京都市・乙訓地域・山城地域における比率は次のようになる。

公立：私立=38校：33校

またこの変更に伴って京都府に4校の理系の特別校を指定したのは大学進学者数を減らさないようにしたいという意向である。府立高校は山城地域に南陽高校と桃山高校、京都市内乙訓地域に嵯峨野高校と洛北高校を進学拠点校にしているが、市立の進学拠点校である堀川高校と西京高校がともに京都市内乙訓地域に入る。

また少子化に伴い、京都府でも高校数を減らしたいという意向がある。学区を大きくすれば統廃合は進め易くなる。

東山高校におけるコース変遷（「特コース」を題材に）

昭和51年度から入学が始まり、平成14年度入学生が最後の募集になった東山高校の「特コース」は、高校入試成績によって選抜していたそれまでの「特クラス」に比べて入学者の大学進学に対する意識が高く、入学した生徒や保護者の要望に応じるように、教育課程・教材ばかりでなく授業時間外・副教材も充実した内容であった。

ところが昭和60年に設けられた。「Ⅱ類」によって「特コース」は第1次学力衝撃を受けた。さらに平成7年には京都府南部に有名私立大学が法人拡張のために付属高校を開校し、この際に第2次衝撃を受けてしまった。僅か10年の間に、第1次衝撃で将来の国公立大学受験のための基礎学力を備えた入学者が減り、第2次衝撃で将来の所謂関々同立レベルを受験させる入学者が激減したのである。

しかし2度の学力衝撃に対して、他のどの私立学校も何も出来なかったのではない。この10年の間に、進学コースを設けている私立高校の中には、国公立大学や有名私立大学合格者数を増やした学校もあれば、以前よりも受験生が集まるようにした学校も何校もあったのである。では何故本校はそれが出来なかったのか。内的要因は何だったのか。

「特コース」は、その学力維持のため、第2次ベビーブームによる1学年800人時代や17学級時代、高校在籍数が3学年で2000人を超えていた数年間でも2学級しか設けなかった。また特コース内の1学級分の生徒は、当時2学級編成であった東山中学校で育てた成績上位の1学級分、現在のパスカルコース・ユリーカコース学力相当の生徒たちであった。だから非常に高い学力が保たれていた。そうすることによって普通コースの学力も良くなったのである。

このコースの高校1年生の特徴であったが、どうしても外部から入学してくる生徒はそれぞれの中学校によって微妙に進度や授業内容が異なっていた。その点、東山中学校からの入学者は進度の足並みが揃っている。東山中生にとっては外部から入学してくる中学生と合わせるために、いわゆる「高校1年生での足踏み」が必要になる。そこで東山からの入学者にとっては不要な足並みをそろえる期間を省き、6年間で効率良い学習効果が上げられるように、中高一貫コースを平成2年に立ち上げたのである。

そのために、特コースにしてみれば最大の安定した優秀な入学者供給源であった東山中学校から生徒が入らなくなった。それまでと同じ入学者数を入れたために特コース入学生徒の学力は著しく低下し、コースの評価は一挙に下がった。しかしこの時に、特コースよりも特コースのレベルダウンによる影響を受けた大きなコースがあった。最も影響を受けたのは高校の母集団である「普通コース」であった。特コースの入試合格最低点を下げてしまった状態で普通クラスの学力が保てるはずがなく、外部から中学生が受験するこの母集団コースが特コースの学力に連動して学力低下を招くことになった。どうしても一貫コースを立ち上げなければならないと言うのであればその際に、特コースは外部募集1学級で十分で、ここに指導力ある教員を集中するべきだったのである。

また自校内では気がつきにくいことだったが、一貫コースを立ち上げてから、公立（外部）中学校の教員が生徒の進学先として東山高校に対する視点が変わった。「中高一貫」ということなのだから、公立中学校などの外部中学校からはこのコースに入学できない。いくら進学実績を出しても、外部中学生が「入学できないコース」では、公立中学校の教員や中学生にとっては自分たちとは無関係なコースである。高校入試説明会でも中学生の先生方から内部入学からによる大学進学者数と、外部入学による大学進学者数を分けて説明するように求められるようになった。聞き苦しい説明をしなければならなくなり、さらに公立中学校からの信頼を失ったのである。

平成14年度に、いわゆる学校改革を行う。カリキュラムとコースの全面改変をして、平成15年度からほぼ現在のコース編成の入学生を迎えるようになった。特コースは学力別に「パスカル」「プラトン」「スーペリア」と形を変えた。

平成21年度現在、高校は在籍生徒総数を1学級で総平均すれば約30人という少数であるが、コースによって在籍生徒数に偏りがある。高校1年生で合計11学級の中に7コースあり、これをさらに2年生では文理に選択させるのだから、科目まで選択させて出来上がった3年生の学級編成はかなり複雑になる。また現在は教員、生徒ともに「縦割り」である。同じ学校にしながら、生徒の生活もコースによって独立し、ほとんど交流がない。コースが違えば別の学校と捉えてもよいほどである。コースに専属化されて縦割りになった教員間で、共通の話題にできる生徒が少なくなってしまう。自分達が対象とする生徒の質が異なれば、教科会の話も少しずつ理解が出来なくなる。また教員は同じ学年集団であっても意思の疎通が出来なくなる。同じ学校に勤めているながら、教員間の一体感が育たなくなることが心配され、私立学校という職場の集団として、コース多様化に対する対応は今後の我々内部の大きい課題である。

今後に対するまとめとして

私のように戦後の第1次ベビーブームの最終期の生まれは、中学高校時代は戦後最もレベルの高い学習指導要領の内容で勉強した世代になる。その時代を過ごした自分自身の、特に中学生時代と現在の中学生とを比較して、次のように考えている。

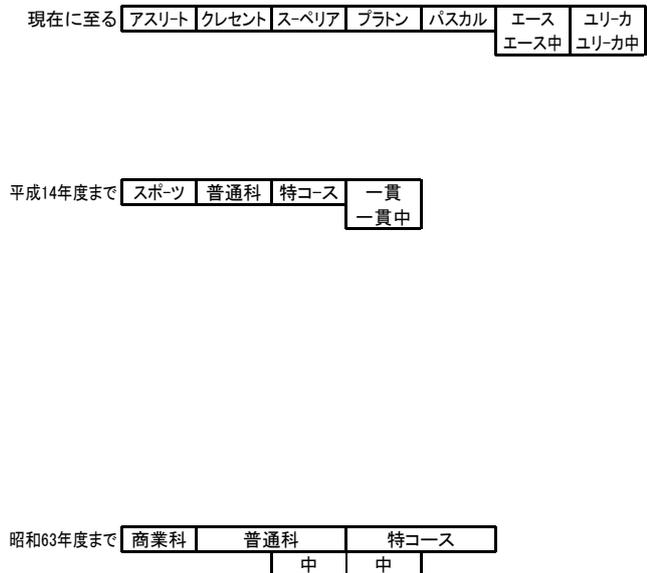
私たちの年代の中学生を一人一人棒グラフの棒だと考えると、中学3年生の時にはその棒は一本一本が同じ太さ、同じ長さであった。しかし色が違った。そして密度が違った。高校進学の際にはその色によって「工業科向き」や「商業科向き」、或いは「普通科向き」に分けられた。さらに密度によって「あの濃さの高校は無理だから、この淡さの高校にしろ」というように受験校を指導された。それが今は、色だけがほとんど同じ色になってきている。大学色である。それも小学校の児童から、本人の周囲・環境は既に大学色である。公立私立とも高校では次々と工業科や商業科が普通科に変わってきている。今では中学生3年生にもなると一人一人の棒の太さも、長さも、濃さも違う。私立学校は勿論、公立中学校でさえ中高一貫校や中等教育学校を設置して、これ等の違いを作っている。それほど様々な棒にしている。それだけ違って色だけが「大学色」である。現行コース編成のように、本校ではいわゆる教室内的のプラトホームを長くしないために、学力別に細分化してコース編成をせざるを得なくなった。

これからの私学は、教育委員会や公立中学校・公立高校の動きを見ながら、少子化と大学全入時代を控えて、どの太さ長さ濃さの「棒」に焦点を当てた生徒を求め育てるのか、それぞれの学校が建学の精神をふまえながらコース編成の指針を出さなければならなくなる。表のように、これまでの30年間ではどうしても公立高校のコース編成に2～3年遅れる形でコース編成をしてきたが、先んずるほどの「情報」と「読み」が私学の存続を決めるかもしれない。

京都府の中学校・高等学校・在学者数

	学校数と 在学者数 の推移	中学校	高等学校	東山高校 卒業生 数
		人	人	人
高校通学圏を大学区	平成21年度	72,024	70,272	348
	20	70,861	70,789	355
	19	71,163	71,436	315
市内小中学校二期制	18	70,132	73,653	380
	17	70,683	75,475	371
洛北高校附属中学校	16	70,960	78,181	347
	15	72,756	79,920	350
	14	74,317	82,889	428
	13	77,340	85,747	422
	12	79,250	87,495	499
堀川高校新体制	11	82,630	88,162	428
	10	85,172	89,068	479
京都府インターハイ	9	87,620	90,977	468
	8	88,323	95,683	525
	7	89,474	100,168	655
	6	91,602	104,422	581
	5	96,344	107,856	615
	4	101,247	113,352	783
	3	105,705	119,473	580
	2	110,213	124,020	775
	平成元年度	116,217	124,262	789
京都国体	昭和63年度	122,691	121,423	574
	62	127,444	116,091	436
	61	128,079	111,641	612
公立高校コース変更	60	125,378	107,512	636
	59	120,972	100,429	580
	58	117,827	96,088	668
	57	114,783	94,442	567
	56	106,982	96,210	621
	55	101,790	94,025	529
京都府新政権	昭和54年度	98,750	89,894	581

東山中学高等学校コース編成



注:コース編成はコースの種類だけを表したもので、生徒数の割合ではない。